オークヴィレッジ 稲本正 会長（73）

自然の治癒力に未来を託す

撮影・飯田英男

トップ直撃

四十数年前、30歳を目前にした物理の研究者が、檜の木を材料にイギリスの「ロイヤルオーク」のような高級家具を作ろうと、「飛騨の匠」で知られる岐阜・高山へやってきた。病んだ近代文明を離れ、森林の自然治癒力に未来を託したいとの思いからだった。いま彼の造った工房と製品は経営者や母親たちから支持され、自然を愛する多くの人が彼の話に耳を傾ける。オークヴィレッジ会長、稲本正氏の挫折と挑戦―。（清丸恵三郎）

いなもと・ただし　1945年2月5日、富山県生まれ。73歳。立教大学理学部卒。大学では理論物理学の大家、武谷三男教授に学び、のちに実験物理学へ転進、研究助手として大学に勤めるが、長野県で山小屋作りに携わった後、飛騨高山へ。家具職人となり、オークヴィレッジを軌道に乗せる。「緑の生活」など循環型社会の重要性や森林資源の有効利用を訴える著書多数。故・菅原文太氏や永六輔氏と親交が深く、文太氏はオークヴィレッジ脇に自宅を建てたほど。トヨタ白川郷自然學校校長なども務める。

【会社メモ】国産材を生かした住宅、家具、おもちゃなどの製造・販売会社。本社・岐阜県高山市。1974年設立。本社と東京、大阪にショールームを展開。資本金3000万円。2017年3月期の売上高約9億円。従業員約70人。

檜の木で高級家具

――飛騨高山で、受注生産中心の家具工房としてスタートしてから四十数年たちました

「イギリスで高級家具の材料に用いられるオークを調べてみると、檜だと分かった。当時、1立方メートル8000円ほどで、この安い檜材を切り出し家具に加工して漆を塗れば、イギリス製家具のように高額で売れるはずだと。それで仲間と高山へやってきたのです」

――大学では物理学専攻。それがなぜ

「ある年、郷里の富山に帰った時、『東京は病んでいる』と強く思うようになり、対して『自然には治癒力がある』と気付かされた。20世紀の文明病に冒されている東京を出て、自然に返る生活ができないものかと」

――仲間とまずは信州へ行くことに

「『武者小路実篤の『新しき村』のような晴耕雨読の生活ではすぐに行き詰まるだろうと。だとすれば木を育て、何かを作り出す技術を身に付けるのが一番いいと考えたのです。そこで長野県内の峠で、山小屋を仲間で建てることにしました。最後まで残ったのは5人でしたが、指導してくれた大工さんが『あんたたちは筋がいい。俺と組めば大町（市）一の工務店がつくれるぞ』って」

――そこで、高山の高等技能専門学校（職業訓練校）に入学する

「高山は『飛騨の匠』の故郷です。ここの技能専門学校に入り、最初半年は刃物の研ぎだけを教えられました。担当の秋松先生はまさに職人で、われわれの真剣度を疑っていたようでしたが、本気と分かると、8月のある日、『明日から毎日弁当を2つ持ってこい』と言い、朝6時から夜10時まで徹底的に仕込んでくれたのです」

労働大臣賞を受賞

――よく半年やそこらで家具職人として独り立ちできましたね

「当時、技能専門学校では年に1回、労働大臣主催の全国的な作品展がありました。秋松先生は『お前たちで総理大臣賞、労働大臣賞などを総なめにしろ。俺がしっかり仕込めば絶対取れる』と。それで必死に頑張ったところ、私は労働大臣賞でしたが、もう1人が総理大臣賞を取るなど全員が入賞したのです」

――高山の農家の納屋からスタートして、清見村（現・高山市清見町）に移ります

「見晴らしのいい分譲別荘地が、坪2000円で売りに出され、私の親父などにも援助してもらって買うことができました。そこに仲間5人が集結して、『100年かかって育った木は100年使えるものに』をモットーに75年、工芸村『オークヴィレッジ』を立ち上げたのです」

旧工房の室内

――販売の方は

「この点は幸運でした。あるとき角川兄弟のお姉さんで作家の辺見じゅんさんが訪ねてきて、私に本を書けと。本を書いて角川歴彦さんを訪ねると、今度は紀伊國屋書店の田辺茂一（創業者）、松原治（名誉会長）さんを紹介された。本を売ってもらうために行ったのですが、『家具展をやらせてほしい』と頼んだら、『本屋で家具。とんだ勘違いだけど、おもしろい』と。以来、2011年に自由が丘にショールームを移すまで、新宿の紀伊國屋にショースペースなどを設けさせてもらいました」

――紆余曲折も多かったようですね

「時々赤字になり、トヨタやソニーなど、いろいろな会社に救われました。ほかにも『一生ここで頑張ります』と言って入社してきた男が3日で辞めていくなど職人が定着しない。この点は、現在の『森林たくみ塾』を設立して解決しました」

アロマ事業に専念

――現在は会長ですが、取締役は退きました

「15年に建築部門を見ていた上野英二社長に経営を全面的に譲りました。10年前にそうしたかったのですが、私自身の人間関係が会社を支える部分が多かったので、そうもいかなかった。しかし、この年に政府系機関も加わるファンドの出資が決まり、任せることにしました。私自身は今、森林資源活用の一環として、樹木から日本産アロマを抽出する事業に力を注いでいます」

作家目指すも親戚の"本職"から「やめたほうがいい」

創立メンバー5人。前列左が会長

【挫折だらけ】

高校卒業後、作家を目指す。「親戚に作家の佐伯彰一がいて、ああいう自由な生活が送れればいいなと思ったから」という。

希望を伝えると、一度書いたものを持ってこいと言われ、1年がかりでノート5冊にびっしり書き込んで持参したところ、最初と最後のノートをちょこちょこと見て、「文章がうまくなっていないな。それに内容が理屈っぽすぎる。頭が理系だから、作家はやめたほうがいい」と断言された。そこで浪人して、立教大学理学部に進学。「人生何度も挫折しましたが、これが最初です」

【長嶋茂雄】

子供のころからの野球ファン。「東京六大学の理工系学部でリーグ戦をやろうという話が持ち上がり、前段で『お金を集めないと』ということになりました。あちこち声をかけて集まったのが300万円。うち長嶋さんが30万円をポンと出してくれた。おおらかで気持ちのいい人だとつくづく思いましたね」

【ドングリ一粒】

「勝手にどんどん木を切り、葉や枝を捨てるのは、人間のおごり。木を切ったら、やはりきちんとお返しをしないといけない。ということで、『子ども一人、ドングリ一粒』を合言葉に、植林活動を推進しています」

【アロマ】

正プラス代表という肩書も持つ。日本の木から天然アロマを抽出する会社だ。「私は何か発見によるイノベーションがあると、やる気になるタイプの人間なのです」と語る。というわけで、目下、力を入れているのがアロマの抽出だ。

「実はクロモジからシャネル5番に入っている香料が見つかったし、ニオイコブシからはゲランに用いられている香りのエッセンスが見つかっています。これで日本の林業が、今後元気になればいいなと考えています」